



ワンポイント・アドバイス



膣脱

写真1、なんだかわかります？



▲写真1

子宮脱？ちょっと違いますよね？そうです、膣脱です。牛が寝たときに膣が脱出

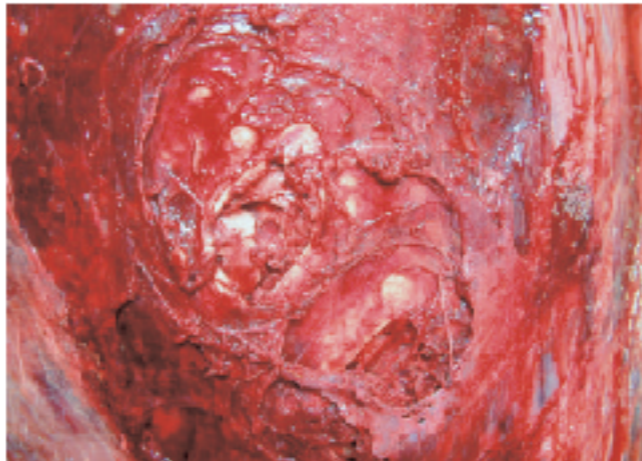
そんな厄介な膣脱ですが…

そんな厄介な膣脱を修復した後、陰門周囲の皮下にチューブを埋没したのが写真3です。尾椎硬膜外麻酔という麻酔下で、日ごろ点滴で使う補液チューブと、一胃のガスを抜く際に使う套管針を用いて行ったのですが、手技は簡便で、現場での処置が可能です。



▲写真3 処理後

する「あれ」ですね。押し戻しても、押し戻しても、出てしまう。ついには、牛が立っていても出っぱなし…、戻そうにも戻せない。糞便や牛床との接触で汚れ



▲写真2 ぼろぼろになった膣粘膜

赤く腫れ上がった痛々しい姿は牛にとっても大きなストレスとなりますし、そんな膣脱に悩まされている組合員の方、いらっしゃるかと思えます。

膣脱って何？

膣脱は通常「膣の底部、側壁および上壁の一部が陰門を通過して脱出した状態」多くは分娩の2〜3ヵ月前からみられ、腹圧の増加する妊娠末期になるほど発生率が高くなるといわれています（まれに分娩後の発生も見られます）。膣の長期間の脱出は膣組織の壊死、隣接臓器、特に膀胱との癒着を引き起こすなど、予後は非常に悪いこともあるといわれています。

この方法は、陰門周囲の皮下にチューブを通すことで、このチューブが、生理的な膣前庭括約筋の収縮と似た役割を果たし、膣を骨盤腔内にとどめるというものです。縫合が表に出ないために化膿もほとんどみられず、陰門の変形を伴わないという利点もあり、多くの膣脱に適用できるようです。

あくまで防止の一手段ですが…

膣脱修復は脱出した膣を骨盤腔内にとどめておくもの、あくまで防止策であり完璧な治療法ではないです。

しかし、炎症、化膿を伴って赤く腫れ上がった痛々しい状態で分娩を迎えることは、思わぬ難産の原因となりますし、ストレスによる分娩前・後の食欲の低下は周産期病へとつながることがあります。分娩までのしばらくの間、脱出した膣を骨盤腔内にとどめてあげることは、牛にとって、脱出した膣への物理的的刺激を与え続けずすみませすし、また管理する側の人の負担も少なくなります。

ただし、定期的な監視は必要で、分娩前には、埋没したチューブを除去する必要があります。

膣脱でお困りの際には共済獣医師に相談してみてください。

